

2020年1月29日

私立大学図書館協会  
国際図書館協力委員会  
委員長 御園 和之 様

2019年度海外認定研修 報告書  
台湾図書館研修（台北）4日間



国立台湾大学図書館

立命館大学 図書館利用支援課  
岩田典子

<目次>

1. 研修概要
2. 訪問機関報告
  - (1) 国立台湾大学図書館
  - (2) 国立政治大学図書館
  - (3) 国立台湾図書館
  - (4) 台北市立図書館
  - (5) 国家發展委員会檔案管理局
  - (6) 中華飲食文化図書館
3. まとめ

## 1. 研修概要

研修名称	アジア・台湾図書館研修 2019（台北）
研修日程	2019年12月4日～7日
参加者	西南学院大学、獨協大学、立命館大学（各1名）
訪問先	台湾・台北市
訪問機関	①国立台湾大学図書館 ②国立政治大学図書館 ③国立台湾図書館 ④台北市立図書館 ⑤国家発展委員会檔案管理局 ⑥中華飲食文化図書館

## 2. 訪問機関報告

### （1）国立台湾大学図書館

台湾大学の前身は日本統治時代の1928年に設立された台北帝国大学であり、台湾で一番歴史のある大学である。学生数は3万人を超え雰囲気は日本の国立大学とよく似ている。

#### 1) 「総合図書館」

21世紀風にしたいという考え方のもと1998年に建設された。重厚感があり空間が広く館内は明るい。地下1階から地上5階まであり、地下には24時間自習室がある。最先端の技術も取り入れられている。特徴を以下にまとめる。

- ・24時間自習室がある。無人対応でセキュリティカード管理である。（台湾はほとんどの大学に24時間自習室がある。）822席あり予約制である。
- ・最近の雑誌は、E-ジャーナルに変更しているため新着雑誌棚は空白が多い。
- ・パソコン等の情報機器は寄付によるもので、設置場所周辺には企業の宣伝がある。
- ・貴重書庫は一般市民も利用可能である。什器に檜が用いられていた。檜は防虫効果がある。
- ・貴重書はデジタル化に取り組んでおり、インターネットで閲覧できるものもある。
- ・AR（拡張現実 Augmented Reality）を取り入れた展示があった。ショーケース内にある楽譜にスマートフォンをかざすと、メロディーが聞こえてきた。



24時間自習室ゲート



雑誌棚（空白が多い）



ARを活用した展示の案内

## 2) 辜振甫先生記念図書館

2014年9月に開設された2階建ての新しい図書館で、日本人の建築家伊藤豊雄氏が設計している。また、什器も日本人の藤江和子氏がデザインしたものであり、書架、机、ステップ台は竹（台湾のイメージであり水分が少ない）である。ガラス張りの館内に流線形の書架が並び、車椅子の学生も利用できるデスクがデザインの工夫により省スペースで実現されている等、新しさを感じさせられる要素が多く取り入れられていた。



流線形の書架



書架の端に設置された車椅子用デスク



コンパクトな  
AV視聴スペース

## 3) 自動書庫

昨年に台湾で初めて設置された。日本製品（日本ファイリングのシステムを導入）である。広さは地下1階～4階で、約130万冊収納可能である。現在は約50万冊の所蔵で、年間30万冊ずつ増える予定である。



自動書庫



## (2) 国立政治大学達賢図書館

台湾を代表する名門国立大学で、学生数は約1万6千人である。卒業生には政治家や官僚が多い。図書館は4つあり、今回はその中でも新設されたばかりの達賢図書館を見学した。太陽光パネルを設置した8階建て、広い空間、吹き抜け構造、車椅子でも通行可能な広い通路、commons、3Dプリンタの設置、映像スタジオ等があり、トレンドを凝縮した図書館だった。

### 1) 寄付による建設

建設費は13億元（40億～50億円）であり、卒業生からの寄付と政府からの援助金で建設している。大学は費用負担をしていない。エントランスに掲げられている図書館の看板に花びらの模様があり、花びらの大きさが寄付金額が表現されていた。



エントランス看板



## 2) 吹き抜け構造

中央部分は吹き抜け構造となっている。各フロアの吹き抜けに面している部分は通路になっており、じゅうぶんな広さが確保されて机と椅子も設置されている。開放感を感じながら学習や読書ができ、その奥の壁に書架が設置されている。全フロアの書架が吹き抜けから見える構造で、その様子が圧巻だった。



上階から吹き抜けを見下ろす

## 3) 創作空間

3D スキャナー、3D プリンタ、レーザー彫刻機等を設置している。学生が製作した作品も展示されていた。



スタジオ（映像制作室）

## 4) 映像制作室

視聴覚制作室で、スクリーン、ビデオ録画および再生機、コピー機がある。

## 5) イベントルーム

小劇場のようになっており、ディスカッションや、イベント発表ができる。

### (3) 国立台湾図書館

台湾には3つの国立図書館があるが、すべて日本統治時代に建てられている。その中でもこの図書館は最も古く 2014 年に開館 100 周年を迎えた。一般的な開架フロアの上には、「本の病院」や「台湾学研究センター」もあり6階建てとなっている。エントランスでは、書店とのコラボレーションにより、図書の販売もおこなっていた。

## 1) 図書館サービス

インターネットも含めた身体障がい者向けの閲覧環境づくり、親子資料センターでの RFID 技術の導入、台湾閱讀フェスティバルの開催、ノート PC 専用席（50 席）の設置等、技術を活用して新サービスを作り出し、利用者がよりやすくサービスを手に入れられるよう努力している。日本の図書も文学からガイドブックまで幅広く所蔵されていた。



エントランス

## 2) 本の病院

古い年代の書物から年代の浅い出版物まで多くの資料を扱っている。室内のライトは害のないものを使用し、温湿度管理も徹底している。紙の年齢を測定する機械や、消えそうなハンコの朱色を保存する薬品等、様々な機器備品が揃えられている。図書館と同じ建物の中に修復施設があることは素晴らしいことである。



修復の様子

### 3) 台湾学研究センター

国内や海外の台湾研究を支援し推進することを目的に2007年に設立された。図書館の5.6階にある。図書館サービスの提供と台湾学にかかわる資料の収集をおこなっている。日本人の研究者も毎年必ず来訪がある。



## (4) 台北市立図書館

台北市立図書館は、本館1館、分館44館、民衆閲覧室（小規模読書室）12ヶ所、インテリジェンスライブラリー8ヶ所となっている。本館は年中無休で800万冊の蔵書と年間1200万冊の貸出がある。現在の図書館は1990年に建てられており、7年後に新図書館の建設が予定されている。

### 1) 利用者サービス（本館）

図書貸出等の基本サービスに加え、子供向けには絵本や児童書の充実、親子鑑賞室（DVD）の整備やイベントの実施もおこなっている。高齢者向けにはカルチャースクールを実施している。シアタールームを設置し幅広い世代が鑑賞できるような映画を選定している。



児童書設置エリア

### 2) コンビニエンスストアとの連携

一部のコンビニエンスストアと提携して図書の貸出をおこなっている。サービス開始から5年となる。利用者は一部費用を負担する。（50元＝約180円）また、オープン閲覧室を設置している店舗もある。レジ前に設置し、持ち出さないような工夫がされていた。



コンビニエンスストアの閲覧コーナー

### 3) インテリジェンスライブラリー（松山空港）

2005年より「智慧図書館」（インテリジェンスライブラリー）という無人の図書館をスーパーマーケット、地下鉄構内、公園施設等、街中の様々な場所に設置している。

松山空港に設置されている無人図書館を見学した。入館にはIDカードが必要である。貸出処理は利用者自身が自動貸出機でおこなう。



無人図書館の様子

### (5) 国家発展委員会檔案管理局

1999年に制定された檔案法（公文書法）によって国家や行政機関の文書管理や保存を目的として檔案局が設立され、その後さまざまな法的整備を経て、2013年に国家発展委員会檔案管理局と名称を改め正式に発足した。司法、法務、国防、財政等のカテゴリで文書が保管されている。紙資料のアーカイブスタジオ、マルチメディアアーカイブスタジオ、アーカイブ資料展示コーナーなどがある。

国家公文書は永久保存として引き取ったものはすべて保管している。保存の観点から資料の修復もおこなっている。アーカイブ保存業務の従事者はすべて国家公務員である。



アーカイブ化作業

### (6) 中華飲食文化図書館

三商グループが母体となり設立した中華飲食文化基金会の図書館である。創始者の翁氏が、若い頃に東京の神田へ研修に行った際に、とても惹かれる中華料理本があったが高額のため購入できなかった経験から、ビジネスで成功した資金をもとに図書館を設立した。

目的が学術研究、シェフ向けのため、書店で安価に購入できる家庭料理本は設置していない。認知度や読書率を上げる取り組みとして、有名シェフやブロガーを呼んでの講演会、雑誌の発行等をおこなっている。



## 3. まとめ

今回の研修では、台湾において中心的な役割を果たしている図書館を訪問し、広い視野で図書館の発展を考えている図書館員の方たちとの交流ができた。いずれの図書館からも所蔵資料の価値を理解し、利用者によりよく提供することに真摯に向き合っている様子が伝わってきた。さらに、大学図書館の見学では、最先端技術が大いに活用されていたことから、これからの大学図書館のあり方を考える機会にもなった。従来の図書館像に縛られない自由な発想が、新たな図書館の可能性を生み出していくのだと実感した。進化し続ける図書館業界の中で私は何ができるだろうか。そんなことを考え続けた研修でもあった。

また、図書館を通して台湾の方たちの熱くあたたかい心に触れることができたことも貴重な経験だった。館長や重要な役職を担っている方たちが、私たちのために時間を割いて、手厚くもてなしてくださった。図書館員には国を超えて共有し合えるものがあるという感動体験を今後の業務の心の支えにしたい。

台湾の図書館は日本とよく似ている。台湾の主要な図書館が日本統治時代に建設されているからだろう。欧米のように歴史も文化もまったく違う国の図書館を見学するというのも刺激を受けられると思うが、比較的感覚の近い他国の図書館というのもたいへん興味深いものである。ぜひ多くの方に訪れて欲しい。

以上